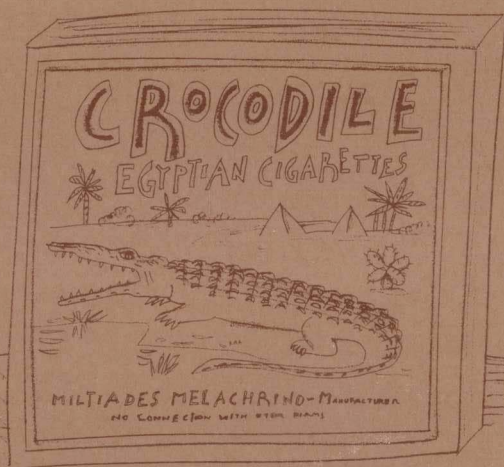


チ
エ
ー
ン
・
ス
モ
ー
キ
ン
グ
沢
木



チエーン
スモーク
沢木耕太郎

No 0249/2

THE UNITED STATES OF AMERICA
DEPARTMENT OF COMMERCE
BUREAU OF CUSTOMS AND BORDER PROTECTION

林工業学院図書館
蔵書章

B-1B.2 21

CLASSIFICATION

DATE ISSUED

VALID FOR MULTIPLE APPLICATIONS FOR ENTRY UNTIL

21

新潮社

BEARER(S)

ISSUED TO

Robert M. Baskin

CONSULAR OFFICER

チェー・ン・ スモーク

発行 一九九〇年十一月二十五日

三刷 一九九〇年十二月一日

著者 沢木耕太郎「さわきこうたろう」

装幀 平野甲賀「ひろのこうが」

装画・挿画 小島武「じまたけ」

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

住所 162 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一―
編集部(03)二六六―五四―

振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Kotaro Sawaki 1990, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN4-10-327508-1 C0095

¥1200

チェーン・スモークキング／目次

鳥でもなく魚でもなく……………	7
逆転、逆転、また逆転……………	23
老いすぎて……………	37
タクシー・ドライバー 東京篇……………	57
君だけが知っている……………	75
わたしに似た人……………	93
メランコリーの妙薬……………	109
走らない男……………	125

アフリカ大使館を探せ……………141

赤や緑や青や黄や……………157

ナセルとマリリン……………173

信じられない……………191

消えた言葉……………209

シナイの国からの亡命者……………227

懐かしむには早すぎる……………243

あとがき……………258

チェーン・スモークンダ

鳥でもなく魚でもなく

私は眠ることにあまり苦勞したことがない。寢床に入ると、ほとんどその瞬間に眠りに落ちていくという感じさえする。しかし、そんな私でも、少年時代のある時期、一度だけ眠れない日が続いたことがある。枕に頭をのせ、闇の中で天井を見上げていると、決まってひとつのことが気にかかるようになってしまったのだ。

——人は死んだらどうなるのだろう。ぼくは死んだらどうなるのだろう。

死んでしまったら、家族と別れ別れになり、どこか知らない場所に行かなくてはならないにちがいない。私にはそれが恐ろしくてたまらなかつた。

ある時、思い切つて父親に訊ねてみた。

「死んだらどうなるの？」

五歳か六歳か、いずれにしてもまだ小学校にも入っていない頃のことだつたと思う。その時、父親が実際にどう考えていたのかはわからないが、幼い子供の死に対する恐怖心を取り除こうとしたのだろう、こう答えた。

「また、生まれかわるのかもしれないね」

それを聞いて、少し安心した。死んでもまた生まれかわれる。それなら死ぬのが怖くない。しかし、死んで生まれかわれるものなら、今の自分も誰かの生まれかわりということにならないか。

「ぼくもだれかが生まれかわったのかな」

幼い私がつぶやくと、父親が言った。

「そうかもしれないね」

それから幾晩か、私は寢床の中で生まれかわる前のことを一生懸命思い出そうとした。

——ぼくはいつたいたれたったのだろう。

しかし、もちろん何も思い出せない。そこでまた不安になってきた。生まれかわる時には、以前のことは忘れてしまうのだろうか。自分がこうして生きていたことを、生まれかわった自分は何も覚えていないのだろうか。だとしたら、生まれかわっても仕方がない。自分はこの自分で終わってしまうのだから。

「生まれかわると、前のことはおぼえていないの？」

別の日、私はまた父親に訊ねた。

「そうだろうね」

「つまらないの……」

私がつかりしながら言うと、父親が逆に訊ねてきた。

「どうして？」

「だって、いくらいいこととしても、つぎに生まれるときにそのいいことをもっていかれないなんて、つまらない」

すると父親が笑いながら言った。

「だからいいんじゃないかな」

「そうかなあ……」

私にはそうは思えなかった。しかし、父親は笑いを含んだまま、どこか自分に言いきかせるような調子でまた言った。

「そうだよ、また新しくやり直せるからいいんだよ」

アルゼンチンの亡命作家マヌエル・ブイグに『蜘蛛女のキス』という風変わりな小説がある。そのほとんどの章が、獄につながれた二人の男の、古い映画についての果てしない会話で終始するのだ。二人のうち、一人は労働組合の急進的な活動家、一人は性犯罪で捕まったらしいホモセクシュアルの男。そのホモの男が、まるでアラビアン・ナイトのシエラザードのように、同房の活動家に夜な夜な奇妙な映画の話をしつつける。

その中に、自分は黒豹くろひょうの生まれかわりではないかと脅おびえている女の登場する、『黒豹女』という題の映画が出てくる。

最初のシーンはセントラル・パークの中にある小さな動物園。黒豹の檻かぎの前で若い女が絵を描いている。そこを通りかかった若い建築家が、風に飛ばされた画用紙を拾ってやることをきっか

けにして、彼女と親しく言葉を交わすことになる。何日かして、建築家は街の画廊のショー・ウインドーで黒豹ばかりを描いた絵を見つける。中に入ると、やはりそこに彼女はいて、再会した二人は食事を共にし、やがて恋におちていく。だが、彼女には、自分が故郷のトランシルバニア地方に伝わる「黒豹が生ませた子供」の子孫なのではないかという恐れがあり、素直に建築家の胸の中に入っていくことができない。

獄の中で、ホモセクシユアルの男モリーナが活動家の男バレンティンに説明するところによれば、その伝説はおよそ次のようなものであるという。

「……確か中世のころの話だったわ。あるとき、何カ月も雨が降り続いたんで、そのあたりの村が孤立しちゃって、村人は飢え死にしそうになった。男たちはみんな戦にだったと思うけど、出払っていた。そしてお腹を空かせた森の獣たちが人里にやってきたの。よく覚えていないわ。すると悪魔が現れて、食べ物を持ってきてほしければ、女をひとり出すようにと村人に言うの。そこで女がひとり村を出た。一番勇気ある女よ。悪魔は、飢えて荒れ狂う黒豹を連れていた。女は黒豹と密約を交わして、不死を得るの。で、何がどうなったのか、女に猫の顔をした娘ができるのよ。やがて十字軍の戦士たちが戻ってきてね、そして、女の夫だった戦士が家に入るの。戦士は妻にキスをしようとした。すると女は夫を、生きたまま食いちぎってしまったというわけ。まるで黒豹の仕業のようにね」

やがて若い女は建築家と結婚する。しかし、キスすると黒豹に変わってしまうかもしれないという恐れを抱いている彼女は、どうしても肉体的に建築家を受け入れられない。彼女は本当の黒豹女なのか、ただの妄想に過ぎないのか。映画は、だからホモセクシュアルの男モリーナの話は、その一点に向かつてしだいにサスペンスが高められていく。面白いのは、モリーナが黒豹の生まれ変わりではないかという女の恐れを肯定も否定もしない立場で喋^{しゃべ}っているのに対し、バレンティンがすべてを精神的な言葉で合理的に解釈しようとすることだ。そしてクライマックス。さまざまな行き違いから建築家の夫への信頼を失ってしまった彼女は、いちど診てもらったことのある精神分析医と家で二人きりの状態になる。分析医は彼女に熱い関心を寄せ、彼女もすべてを失ってしまったという意識からその腕の中に飛び込んでしまう。互いの体に腕をまわし、唇を合わせると——突然、彼女は変身し、彼の喉^{のど}に爪を立て、彼を殺してしまうのだ。モリーナは黒豹に変わったといい、バレンティンはいやそれは単に精神病による殺人なのだと解釈する。やがて彼女は夢遊病者のような足取りで夜のセントラル・パークに向かい、黒豹の檻の前にたたずむと、昼間盗んでおいた鍵で扉を開け、黒豹を自由に放つてやる……。

彼女が本当に「黒豹女」だったのかどうかは最後まで曖昧^{あいまい}なままだが、もともと荒唐無稽^{こうとうむけ}なこの話に私が強く惹かれるのは、この若い女が、自分がかつて何者であり、やがて何者になるのか、という私の少年時代の恐れを共有しているように思えるからだ。

この「黒豹女」の話とよく似たものを、私は日本の最西南端にある与那国島よなくにじまで聞いたことがある。

昔、久米島くめじまから沖繩本島に渡る船が時化で漂流し、ようやくのことで与那国島に流れつく。漂着した一行には、男たちに混じって一人の女と一匹の犬がいる。やがて男たちは一人また一人と犬に噛み殺されていき、ついには女と犬だけが残されることになる。そうした女と犬だけの生活が続いたある日、小浜島に住む漁師の男が流れつく。男が女に出喰わすと、女はここには猛犬がいて危険だから逃げてくれと言う。男は帰るふりをしながらも、策略をもって犬を殺すことに成功する。男は、女に、犬は殺したから安心しろと言う。女は死骸をどこに埋めたか訊ねるが、男は答えない。そのうち、二人は一緒になり、五男二女をもうけて幸せに暮らすようになる。しかし、ある時、男にふと故郷の小浜島に帰りたいという気持が起こる。そして、実際に帰ってみると、小浜島に残っていた妻が思いもよらぬほどの老婆になっていることに愕然がくぜんとする。男はふたたび与那国島に戻ることにし、ある夜、ひそかに小浜島を抜け出していく。それを見た老妻は、機はたにかけてあつた織物を断ち切り、

「小浜島と与那国島とは縁を切った」

と叫ぶ。

与那国島に戻った男は、また女と七人の子供との元の生活に戻ったが、ある晩、上機嫌で話しているうちにうっかり犬の死骸を埋めてある場所について口をすべらしてしまう。女はその夜のうちに家を出る。朝になり、不審に思った男が犬の死骸を埋めてある場所に行ってみると、女は